





社会福祉法人 興望館 い が ら し み な  
地域活動部 **五十嵐美奈さん**

## 施設分野

# 学生ボランティア育成事業のコーディネーターとして

●社会福祉法人 こうぼうかん 興望館 [東京都墨田区]

興望館は、保育園、学童クラブ、児童養護施設とキャンプサイトを持つ児童福祉施設である。特に小学生以上の子どもたちにとっては、学生ボランティアのかかわりが有益であり、少し年長の若者たちと過ごすことは、身近なモデルを得られるという意味でも魅力的な体験となっている。学生たちは自然体験キャンプ(5泊6日)や日々の学童クラブの活動をとおして、子どもたちと触れあっていく。

### ボランティア活動における3つのポイント

コーディネーターとしてかかわってきた経験から、児童分野で活動するボランティアの役割は、次の3点であると考えている。①生活を支える活動(清掃、食事・身支度の世話など)に従事すること。②「甘え」の気持ちから感情をぶつけてくる子どもたちと誠実に向きあうこと。③楽しい時間の創造をサポートすること。このようなボランティア活動が効果的に展開され、学生が自信をもって取り組めるよう、キャンプ前に10回の研修を実施する。遊ぶ楽しみを実感し、子どもたちに託す願いを共有し、保健衛生、野外活動、プログラム運営などの実践的な技術を学ぶことを目的としている。

### 学生と子どもたちの出会いの「果実」

学生が自分の無力さにつぶれることなく、活動を継続できるよう促すには、研修だけでなく、専門的な視点を持った職員との評価会

が不可欠である。私たちは、子どもたちと学生一人ひとりの状況を見極めたうえで、毎日の活動を振り返ることにしている。

そうしたボランティア活動1年目の感想として、ある学生は、「子どもたちと生活を共にし、多くを経験するにつれて、人に気持ちを伝えるには本気でなくては伝わらないと学びました。キャンプを通して、自分の気持ちを恐れずにぶつけられるようになりました」と述べている。

興望館では、さまざまな世代がかかわりあうことで影響しあい、育ちあうことができる。そして、学生や子どもたちがお互いの存在をとおして成長し、そのことを誇りに思う姿を目の当たりにする時、その出会いを演出するコーディネーターとして大きな喜びを感じることができる。



キャンプ説明会でキャンプソングをリードする学生ボランティア

## ボランティアコーディネーターから聞く

# ネーションに向けて

ボランティアコーディネーターは、ボランティアを求める人や地域のニーズをいかにキャッチし、活動者の思いをいかに生かしていくか、そして、どのような活動支援やプログラムづくりを行っているのか。大学、施設、病院、社協といった分野での具体的な取り組みや考え方などについての「生の声」を紹介します。

## 社協分野

# 「ひと」に寄り添うコーディネーションをめざして

●小坂町社会福祉協議会 [秋田県小坂町]  
<http://www2.ocn.ne.jp/~kadaru/>

### 障がい者のための余暇支援事業を展開中

「地域で暮らす知的障がいのある人が、休日(余暇)の過ごし方で困っている」と、当事者の家族や福祉施設職員から聞いた6年前の言葉がきっかけとなった。

その当時、公的サービスは平日利用しかなく、このことは休日を含めたトータルのケアを必要とする人にとっての大きな課題となっていた。

そこで、社協のVコーディネーターとして何ができるかを検討するために、一部の当事者家族や施設職員などの関係者が集い、出した答えが「休日を一緒に過ごしてもらおうボランティアが必要」というものだった。

「障がい」ってなんだろう？ボランティアに呼びかけては直接当事者の声を聞く学習会を開催したり、施設の協力を得て利用者との外出同行などを重ね、当事者とボランティアとの距離を埋めていく活動を続けてきた。

しかし、ボランティアと一緒に過ごす休日とは、どんなものか？地域にはどのような障がいのある人がいるのか？という不安が



小坂町社会福祉協議会 きむら ひろし  
ボランティアコーディネーター **木村 寛さん**



あった。それには、近隣の当事者支援団体や関係機関のサポートをいただいた。

そして、支援組織の設立とともに余暇支援事業(インフォーマルサービス)が始まり、ようやく3年を迎えようとしている。

### 公的サービスとは違う「手づくり」の活動を

具体的な活動は、当事者の意向を汲みながらレクリエーションを中心としたメニュー(お花見・バーベキュー・クリスマスなどのほか、スポーツや温泉浴)にしているが、町のイベントへの参加やボランティア活動も取り入れている。今では、当事者・ボランティアともども活動に手応えを感じ、次年度にはその組織の主たる活動として新

たな形でスタートを切ろうとしている。

障がい者施策においては、昨今めまぐるしい動きだが、公的サービスとはひと味違う「手づくり」の活動を、たとえ細くても長く継続してほしいと思っている。

そして、どんな障がいがあろうとも、地域で暮らせる環境を地域の人たちと一緒に考え、取り組んでいきたいと思う。

当事者の余暇活動の一環である  
明治百年通りの清掃活動



## 効果的なボランティア活動の実践に向けて ボランティアコーディネーターの担う役割とは

めが こ  
妻鹿ふみ子さん

京都光華女子大学 教授

先の事例で紹介したとおり、多彩な領域におけるボランティア活動の推進・支援においては、ボランティアコーディネーターが重要な役割を担っています。ボランティアの活動者と対象者（地域）の双方の思いや希望を汲み取り、効果的なボランティア活動を生み出していくためのコーディネーションのポイントなどについて、4事例への評価も交えながら、京都光華女子大学の妻鹿ふみ子教授に伺いました。

### 魅力的なボランティアプログラムのプロデュースのために

効果的なボランティア活動を生み出していくために、ボランティアコーディネーターとして求められる基本姿勢は、ボランティアならではの役割とは何か、言い換えれば、なぜ、そこにボランティアが必要か、あるいは、一つひとつの取り組みにおいて、どのようにボランティアとの協働を図るのかを常に考え続けることである。

ボランティア活動の主演は、あくまでもボランティア自身とその活動の協働の相手であり、コーディネーターは黒子的な存在である。しかしながら、コーディネーターなくしては、より良い活動や成果は生まれてこないと思っている。ボランティア活動そのものは、コーディネーターがいなくても成立するが、ボランティア自身が十分に力を発揮できる魅力的なプログラムのプロデュースにおいては、コーディネーターが果たす役割が大きい。

興望館の事例では、子どもたちと学生とが楽しい時間を過ごすために、学生だけでは気づかない点をコーディネーターが上手にプロデュースして、魅力あるプログラムづくりとして成果をあげている点が非常に興味深い。

### ボランティア活動の具体的なニーズをいかにキャッチするか

人や地域にかかわる課題は多岐にわたっており、その解決に向けたボランティアコーディネーションのために重要なことは、まず、ボランティアを必要とする具体的なニーズを、いかに積極的にキャッチするかである。

小坂町社協の例では、地域福祉をすすめる視点から、知的障害者の休日の過ごし方といった課題に対して常にアンテナを張り巡らせていた結果、ボランティア活動としてプログラム化し、解決策を導き出したものといえる。その意味で、社協の取り組みの場合には、地域福祉にかかわる一つひとつの事業がニーズの宝庫となっており、職員全員がそのことを常に意識していくことが大切である。

東北福祉大学の例は、地域に開かれた大学としての積極的な働きかけにより、地域の人たちを巻き込んだ活動として評価できる。現在、多くの大学ボランティアセンターの実践している取り組みにおいては、学生たちと地域とのネットワークや協働といった日頃のかかわりあいのなかから、新たなニーズを発掘することでできる可能性を感じさせてくれる。

また、病院や福祉施設へのボランティア受入れの場合には、現場の職員の方々が、日頃から仕事のなかで利用者の QOL（Quality of Life、生活の質）をいかに高めることができるかを考え、あるいは利用者の「つぶやき」に耳を傾けたうえで、そこにボランティア活動が成立する可能性を意識しながら、コーディネーターとの連携のもとでプログラム化していくことが大事となる。

### ボランティア自身のモチベーションの把握と理解

ボランティア活動が一定の効果を生み、継続していくためには、そこに携わる人たちのモチベーションが大事であることは言うまでもない。そのなかで、コーディネーターにとって課題となることは、

ボランティア自身が活動を始める前の段階で必ず面接をして、一人ひとりのモチベーションやボランティア活動に対する思いを聞き出し、コーディネーター自身がしっかりと把握・理解することである。

単に、ボランティア希望者と対象者をマッチングするのではなく、ボランティア個々のモチベーションや思いを受け止めたうえで、それに適した活動を紹介し、その後の活動支援や継続のためのフォローをすることが大事である。そのことによって、活動そのものの成果や、ボランティア自身の「学び」と成長に結びつけていくことができるのである。

その点で、外旭川病院ホスピスの事例は、ともすれば過剰なサービスとなりがちなボランティア自身の熱い思いを調節しながら、現場の方たちのニーズと上手に結びつけ、ボランティア自身と対象者の双方の気持ちを満たすような魅力ある取り組みを実践している好例といえよう。

### 予測できない楽しさをもたらすコーディネーションを

ボランティアコーディネーションの実践では、ボランティア自身とボランティアの対象となる人や地域といった双方のニーズを生かし、新たな活動を生み出すこともできる。

例えば、ボランティア自身が「自分は何ができるのか」あるいは「やりたいけれど、何をしたらいいのかわからない」など、できることややりたいことを自覚できない場合には、コーディネーターが、ボランティア自身との話しあいのなかから、本人のスキルや可能性をできるだけ多く引き出すことにより、そのなかから新たな活動を生み出すきっかけとなる。

一方、ボランティア活動の対象となる人や地域の側、さらには従来の「枠」にとらわれがちな受け入れ組織や職員にとっても、コーディネーターがボランティアという人的資源を持ち込み、活動を提案していくことにより、自分たちだけでは思いもつかない課題解決の方法やその可能性を見出すことにもなるのである。

また、そうした活動のプログラムづくりにおいては、初めてボランティア活動をする人にとって、具体的な約束事項を定め、それを十分に説明することが重要なポイントとなる。外旭川病院ホスピスでの「ホスピス・ボランティア五原則」や興望館での活動に関する事前研修などは、ボランティア自身にとっても、利用者にとっても丁寧で豊かなプログラムをつくり上げていくために、こうしたポイントを実践しているものといえる。

コーディネーターに支えられて高い意欲を持ち続けるボランティアによって、地域や施設に魅力的な活動が生まれ、ボランティアゆえの自由な発想による、化学変化のような予測できない楽しさや可能性をもたらすことが、ボランティアコーディネーションの効果であると同時に、それがコーディネーターにとっての醍醐味となっているのである。

